

Vol.

1

創刊号

2025



十和田湖の自然とヒトが奏でるハーモニーに耳をかたむける

トワダノオト

TOWADA no OTO

特集

十和田湖で働く、
十和田湖で生きる。



Interview

合同会社十和田湖ガイドハウス権代表 太田泰博／十和田湖増殖漁業協同組合ふか場長 荻沢道明／有限会社十和田荘代表取締役 中村秀行／
一般社団法人十和田奥入瀬観光機構事務局次長兼地域マネジメント部長 安藤巖乙／お土産とお食事の店もりた 森田陽子／
十和田湖自然ガイドクラブ会長 中川一樹／道の駅十和田湖駅長 柴田美紀子、業務責任者 柴田和博／十和田プリンスホテル総支配人 陶 光昭

十和田湖に生きる自然やヒトが奏でる音

ひとつひとつに耳をかたむける。

二重、三重、幾重にも織り成されるハーモニーはどこまでも広がる。

ありのままに、ときには変化しながら。

それは十和田湖でしか生きられない“トワダノオト”

自然とヒトが調和してこそ生まれる十和田の宝物

特集

十和田湖で働く、 十和田湖で生きる。

20万年以上前の噴火活動から少しずつ、そして大きく変化しながら生き続ける十和田湖。目の前に広がる圧倒的な大自然と人とのかかわりは平安時代の信仰心から始まり、明治時代には鉱山開発やヒメマスヒメマスの養殖など産業の発展を遂げました。1936年に十和田八幡平国立公園に指定され、観光地としても人気を博します。多くの人がある神秘の湖をひと目見ようと訪れるのです。そして東日本大震災、コロナ禍という未曾有の事態を経て、令和へと突入しました。栄枯盛衰1000年の中で、先人たちが築いてきた歴史・文化は人の手によって途切れることなく、つながっています。時代が急スピードで変化するいま、私たちは十和田の自然とどうかかわり、未来へと向かうべきなのでしょうか。本特集では、十和田に生業をもつさまざまな人の視点を通して新たな宝(トワダノオト)を発掘し、次の1000年をつなぐ担い手たちの思いに耳をかたむけます。

ありのままの十和田湖を受け入れる



合同会社十和田湖ガイドハウス
代表

太田泰博

Yasuhiro Ota

Profile

1981年十和田湖畔生まれ。音楽を志し上京する。十和田湖の音楽イベントをきっかけに帰郷。十和田湖ガイドハウス代表社員。

十和田湖に帰ってきてよかった

「小さい頃は、いつもこの外輪山を越えたいと思ってた。街のデパートやスーパーの方が魅力的だったしね。遊び場は森や湖なんだけど、ここには何もないと思ってたな。十和田湖がどう素晴らしいかを知る機会が少なかったかも。俺が子どもの時、十和田湖はすごく忙しい場所だったんだよね」

ネイチャーガイドの太田泰博さんの実家は休屋の十和田湖畔にある「喫茶憩い」。高校から十和田湖を離れ、卒業後はミュージシャンを目指し上京。十和田湖の音楽フェス開催をきっかけにUターンした。その後十和田・奥入瀬をフィールドにするガイドカンパニーに所属することになったの

が2010年。音楽は細々と続けながら、ガイド活動をメインに働きはじめた。

「はじめはとにかく必死に覚えたよ。それまで自然についてきちんと学ぶ機会がなかったし、人生で一番頑張ったかもしれない。でもなんとなくいいなと思っていた森に名前がついてきて、だんだんと解像度が上がってきたのが嬉しかったなあ。カナディアンカヌーもその時が初めてだった。カヤックは小学校の時に課外授業で習ったけどね。いま思えばそれも

自然を好きになるきっかけの一つだったかも」

太田さんは7年前に仲間と「十和田湖ガイドハウス」を立ち上げ、十和田湖でのカヌーツアーを主宰している。

「十和田・奥入瀬って、原生的で奥深いイメージだよ。なのに、固有種がないんだって。普遍的ともいえる何種もの植物や動物が共存することで生まれる希少な森なんだよ。これってすごいこと。さらに、そんな森に扉一枚開けたら誰でもアプローチができるの。よくQTAって言われるけど、クオリティ（Q）の高い自然に、トレイル（T）が整備されて、アクセス（A）がいい。これが全部揃っているんだよね。」

つまりこの超一級の自然は、ハンディキャップをもった人でも優しく受け入れてくれる。太田さんは、今一番そこに心が動いているとも話してくれた。

「『フィールドミュージアム構想』って奥入瀬や、各地域でも取り組んでるけど、まさに博物館だよ。この自然自体が常設展で、春夏秋冬が企画展。樹がさ、自然に倒れていたらもうそれはイベントだよ。その後はまた植生の遷移が見られるんだよ。すごくおもしろい！ いやあ、本当に帰ってきてよかった」

立体的なレイヤーで自然を観察する

十和田湖を訪れる際、その大きさや特徴的なたち、透明度など、つい湖に目が奪われがちだが、もっと立体的に見ると楽しくなる。カヌーに乗って湖上を進めば、なおさらだ。

「水際の植物や、御倉半島とかを眺めていると、ここは火山噴火でできたカルデラの中で、外輪山に囲まれているということに気付く。森とも距離が近くなるよね。俺は十和田湖が立体的に見えた時すごく感動したから、ゲストにも自分が感動したことを伝えていきたいと思うんだよね」

巨大なカルデラ、森と水、さまざまな生き物たち、そして苔や菌類……散りばめられたパーツをつなげてくれるのが太田さんであり、ネイチャーガイドだ。

「さっき固有種がないって話をしたけど、何かを見るためにとか、目的をもたずに来る方が感動できるかもってふと思った。いろんな時に、移りゆく自然を見てほしい。ふらりと立ち寄って、気持ちいいって思える瞬間に出会えたら最高だよ」

インタビュー時、十和田湖は横殴りの吹雪。とても気持ちいいと思える日ではなかった……。

「こんな荒れている日にフィールドには出ないよね（笑）。でも、これが生きて動いている自然なんだよ。静寂な時こそ自然も生きている、というのはきれいなストーリーだけど、嵐の日こそ生命を感じるの。だから静寂がよりよく見えるし、冬があるから新緑が見なくなる。もちろん冬の世界観もすごく素敵だよ」

春夏秋冬はもちろん、365日、一生のうちに一



日として同じ十和田湖に巡りあうことはない。当たり前なことだが、つい見失いがちなことを太田さんは教えてくれた。ありのままの自然を受け入れることで、十和田湖の見え方は変わる。

「信仰があって、湖が聖域だったから守られてきたと思うし、鉾山があったから、道が整備されてアクセスがしやすくなった。この一流の自然を、こんなにも気軽に見ることができるのは先人たちのおかげ。歴史の積み重ねなんだよね。自然や暮らしを個々に見ると、『ここにしかない』というものはないかもしれない。でも、人の手によってこの場所を一流にしている。それが十和田湖ブランドなんだと思う」

自然の集合体だけじゃなく、人の力がとても強く作用している、そんなことを感じさせるのが十和田湖だ。

「十和田湖って、そんな俺たちのことどう思っているんだろうね？」

①「ヤドリギ」はブナやミズナラなど落葉広葉樹に半寄生する常緑植物。鳥が糞を食べる種を運ぶ。春から秋にかけてその姿は葉に覆われ、落葉した冬に目立つ。②御倉半島は火山活動によって形成された溶岩ドームの一部。クジラのようなかたち。③カヌーツアーは年間通して楽しめる。モックロームの世界は冬ならではの。

歴史の文脈をつなぐ人

十和田湖増殖漁業協同組合
ふか場長

荻沢道明

Michiaki Ogasawa

Profile

1963年十和田湖畔生まれ。漁師であり、ひめすのふか場長としても働く。料理好きでひめすの生かし方を日々模索している。

十和田湖で働くことの責任感

十和田湖を訪れたならば、一度は「ひめす」を食べてみたいという人は多いだろう。ピンク色の美しい身は刺身、焼き魚、燻製、天ぷらなどに姿を変え、たくさんの観光客を魅了している。ちなみに「ますこ（ひめすの卵）」も最高に美味しいと評判だ。しかし、ひめすは最初から十和田湖に生息していたわけではない。

低い水温、奥入瀬渓流にある銚子大滝の高い壁……さまざまな自然条件から魚が棲まない湖と言われていた十和田湖に養魚事業を立ち上げたのが秋田県・鹿角市出身の和井内貞行。鉾山（十和田湖は江戸時代から鉾山として開発された）で働く人たちに新鮮な魚を食べさせたいと20年以上にわたり研究を重ね、1897年には人工ふ化場を建設。本格的に養魚事業に取り組んでからも幾度も失敗を重ねた1903年、北海道・支笏湖から譲り受けたひめすの卵をふ化させ放流したところ、3年後に大量のひめすがふ化場へと戻ってきた。生まれた場所に帰るひめすの習性を生かして、養魚が始まったのはこの時から。

100年以上経つ現在、十和田湖増殖漁業協同組合がひめすのふ化事業を引き継ぎしている。組合員で漁師としても活動する荻沢道明さんがふ化場の場長を務め、採卵～稚魚～放流までを一貫して担う。10月頃、戻ってきた親マスから毎年約100万粒の卵を採卵（そのうち育て放流されるのは約70万尾ほど）してふ化させる。受精した卵は一粒一粒生きているかを確認しながら選別。漁が終わった後の冬期も水槽の掃除、稚魚に餌をやるなどふ化場での作業は尽きない。

「掃除をしないと栄養のない自分たちの糞を食べちゃうからね。成長が遅くなる。病気にかければ感染してひとつの水槽の稚魚が全部ダメになるから神経使うよ」

水槽の水は年間通して一定温度の湧水を使う。積算温度（サケのデータでふ化するまでに約780～800℃の水温が必要とされている）が成長に関わるため、冬に水温が下がる川の水などには頼れないのだ。

「今年（2022年インタビュー当時）は豪雨被害でひめすが獲れなかったんだよ。ふ化場はなんとか雄を使い回して例年通りの卵はかせたけど、温暖化の影響もあると思う。昔はお正月に検卵してた時もあったの。季節が早くなっているよね。天候の変化にすごく左右されるし、太刀打ちできないこともたくさんあるけど、やれることをやっていくしかない」

荻沢さんは宇都部地区の漁師の家に生まれた。高校の電気科を卒業して東京へ働きに出たが、父

親の体調が悪くなり1年で帰郷。帰ってすぐはホテルで働いたり漁業権を人に貸して別の仕事をしていたが、父親が亡くなり、そろそろ本腰を入れようと漁師の道へ進んだ。

「母親はまだ元気だし、父親が頑張ってたってきた漁師を捨てるのは可哀想だと思った。十和田湖がいいとか、漁師になりたかったとか、そういうことではないんだよね」

小さい頃からこの土地に住む荻沢さんに、十和田湖はどんな風に見えるのか尋ねた。

「十和田湖？ 当たり前すぎて考えたことないよ。毎日船で湖に出ればこの景色だしね。小さい頃から魚にも連れていかれた。小学生の頃は道路の除雪もされてなかったから腰ぐらいの雪かき分けて学校に行ってたな……辛かった思い出ばかり（笑）。転べば穴あきそうなジャージ着てさ。自然すぎる中にいたよね」

荻沢さんは十和田湖の漁師であること、ふ化場で働くことを「選んだ」というより“受け入れて”生きている。

「責任感はあるよ。十和田湖のみんなの生活もかかっているし、和井内さんから繋げてきたものを俺の代で終わらせるわけにはいかないじゃない」

次世代のための魅力発信

「ひめす、どうやって食べる？俺はほとんど生では食べない。一夜干しにしたり、燻製したり、魚醤も作ったりするの。冷凍したルイベも美味いよ」

十和田湖ひめすはブランド化され規格を決めて販売されている。規格外や採卵に利用した親マスはほとんど廃棄されるのが現状。この状況に荻沢さんは、さまざまな加工に挑戦している。魚醤はラーメンをつくる際の隠し味にするというが、

なかなかの料理好きだ。

「廃棄はもったいないよね。ずっとなんとかしたいと思ってたんだけど、今ようやく動き出してるんだよね」

小坂町や十和田市が漁協や商工会などの地域団体と連携して立ち上げた「十和田湖ひめすブランド推進協議会」は「十和田湖ひめすを食べようキャンペーン」などを数年前から継続して開催しているが、2022年からは未利用ひめすの活用を検討を始め、魚醤の試作を開始し、2024年に発売した。

「今は体験型じゃないと観光は難しいって言われている。こうやってどんどんひめすを売っていくのもいいけど、漁師の魅力も伝わるようにしなきゃ獲る方が増えていかない」

十和田湖の漁師は若手がぐんと減っている。親が漁師でも自分から漁師を継ぐと言わない世代がほとんど。高齢化の一途を辿り、組合員はこの20年で半分近くに減少。荻沢さんはそこも危惧しているのだ。

「漁師体験をできるようにしたり、美味しい加工品を作れば、きっと魅力が伝わって十和田湖でのひめす漁が持続していくと思う」

和井内貞行から始まった十和田湖でのひめす増殖事業は今、新しい取り組みを考えながら、歴史をつなごうと必死で動いている人たちがいる。

①冬場も稚魚の飼育のためふ化場へ通う荻沢さん。ひとつの水槽（1.5m×8m×0.6m）に約10万尾の稚魚が飼育されている。②荻沢さんが試作している燻製や一夜干しなどの加工品。③ふ化場は小学生の社会見学も受け入れている。



一時代を築いた宿泊施設

有限会社十和田荘代表取締役／
一般社団法人十和田湖国立公園協会理事

中村 秀行

Hideyuki Nakamura

Profile

1955年十和田湖畔生まれ。学習院大学卒業後、
家業を継ぐ。温泉発掘や冬物語の実行委員長を
務めるなど、十和田湖の観光を支える。

5部屋の民宿から十和田湖の祭りを 仕切る大型ホテルへ

『国境祭（くにぎかいまつり）』はすごくおもしろい祭りだった。私は『黒石よされ』と『花輪ばやし』担当でね、十和田湖まで来てもらうのを説得したんだよ」

当時は振り返るのは十和田湖で一番大きい宿泊施設、十和田荘を経営する中村秀行さん。国境祭とは青森、秋田、岩手の主要な祭が十和田湖に一堂に介するという贅沢な祭で、2010年までに全29回が開催された。「青森ねぶた」、「八戸えんぶり」、「花輪ばやし」に「秋田竿燈」、「盛岡さんさ踊り」など10以上の祭りが現北駐車場に大集合、十和田湖が大歓喜の渦に包まれる2日間だ。

「元々大手の旅行会社発案でね、一緒におもしろいことやろうって声がかかった。旅行会社と地域でお金は折半。補助金もないから、みんな自分たちで賄うしかなかった。グランドホテル、観光ホテル、湖畔荘……ライバル同士、一国一城の主たちにどうお金を出してもらうか、どう動いてもらうか、まとめるのが大変だった。十和田荘が実行委員長をやっていたけど、他のホテルに比べると新参者だったからね。でもそこは親父の秀三がうまかった。自分が多く負担するところを見せるの。お金も人員もとにかく自分のところから一番多く出す。そうして周りを納得させて、協力してもらえるようになった」

国境祭の機軸席は、各宿泊施設や商店、取引先などの従業員で協力して組立・解体を行っていた。祭りを呼ぶということは並大抵のことではない。山車はもちろん、人員も必要だ。交通費、宿泊費に食事代……トータルで2000万円の経費がかかったという。しかし、十和田湖に落ちるお金は2日間で2億円というからその額だけでもインパクトは大きい。この祭りの盛り上がりが手に取れる。「プリンスホテルや十和田ホテルが、会場と少し離れているから心配だったが、おこぼれたく

さんいただいてますって言ってもらえたからホッとした。みんなが儲かってくれるのが嬉しいからね」

十和田荘の前身は5部屋の民宿。さらに前はひめますやエビの燻製を作って各施設に卸す商売をしていた。その後現在の場所に移って、部屋数を増やしていく。先代で180室までの代で、秀行さんの代で234室へと徐々に規模を拡大した。

「親父は酒飲みで自由人だったから、お袋がよく営業に行っていた。北海道の学校の修学旅行をとってきたりね。それで部屋数が足りなくなって増築したの。私は大学卒業してすぐここに就職したけど、27、8歳で任せてもらえたから、それからどんどん突っ走っていった（笑）誰も止めてくれないからさ」

当時、団体旅行の最盛期。大手の旅行会社に相手にされない時期もあったが、努力と営業で旅行会社との関係を築いていく。2005年頃、十和田湖で温泉を掘ると決意したのも秀行さんだ。バブ



ルの追い風もあったが、リーマンショックと東日本大震災、新型コロナウイルスで大打撃を受けた。大きなホテルが倒産する中で、なぜ十和田荘は生き残ったのだろう。

「昔、旅行会社が十和田観光ホテルでは部屋数が足りないからうちにも予約を入れてくれたんだけど、食事は観光ホテルに合わせるって言うのよ。どうすればいいか尋ねたら、自分で聞いてこいって。ひどいよね。悔しかったし何とかしたかった。あとは、十和田湖ってやっぱり湖でしょ。湖は見えないし、もとは数だけの二等地。そんな悪条件だから頑張ってたのかもね。それに、自分たちの土地だったから好きにできた」

観光地・十和田湖と一緒に 持続するまちへ

例えば旧十和田湖小学校をひめますの養殖場にしたり、太陽広場をキャンプができるようにしたり、小規模でいいから一宮に店舗を増やす……いろんなアイデアを出してもっとかたちにしたりいと秀行さんは話す。

「今バツと思いついたこと言っただけ。俺の頭はもう固いからさ。発想の転換も大事。物事を柔軟に考えられる若い人にどんどん頑張ってもらいたい。次の世代に早く銀行印を渡して自由にやらせてみるのもいいじゃない。温泉掘る時も行政に色々言われたけど、掘ってみなければわからないの。と



にかくやってみないとね」

十和田湖国立公園協会の理事長として、十和田湖は今後どうあるべきかを問いかけた。

「あと40年もすれば私は死ぬし、この世にいない。周りの漁師や商店もそうかもしれない。ただ、

そんな状況であっても十和田湖・奥入瀬は残るんですよ。十和田火山が爆発しなければね。それだけは変わらない事実で、国の財産といえるほどの日本有数の観光地なの。観光地は働いてお金を生み出す場所だから、もちろんさまざまな商売があっていいけど、持続できるように考えてほしいね」

過去に、あるホテルの持ち主が次々に変わり、信頼できない人の手に渡ったこともあったという。結局今は廃墟と化している。

幼い頃、山でカエルや蛇を捕まえてはドラム缶に集めたり、占場（十和田湖で一番神聖な場所といわれる）で泳いでお賽銭を拾っていたという秀行さん。神社回りはもちろん遊び場だった。60年前も今も、秀行さんの目に映る十和田湖の自然は変わらないけれど、人の手によって新たに生み出された負の遺産は確実に残っている。

「観光ホテル跡地も、個人的には何もいらさない。すごく見晴らしが良くっていい景色が広がっているから、ちょっと手を入れて整備するぐらいでもいいんじゃないかな。何か事業をするのであれば、体力のある人に来てもらって、継続してやってほしいですね」

●北東北のお祭りが一堂に介する十和田湖の一大イベント、国境祭りの資料を見ながらインタビューを受けてくれた中村社長。●十和田荘外観。十和田湖で収容人数が1番多い宿泊施設。「十和田荘」看板の横には石川啄木の歌が刺された石碑が残る。

十和田湖の光を観る

一般社団法人十和田奥入瀬観光機構
事務局次長兼地域マネジメント部長

安藤 巖乙

Iwao Ando

Profile

1987年新潟県十日町市出身。編集者として出版社に7年勤務。環境省の利用企画官を経て、地域観光の戦略実行部隊へ。

八幡平国立公園内の各種利用施設の展示改修、紅葉の絶景で有名になり、路上駐車や展望デッキのオーバーフローを起こしていた葛沼のオーバーツーリズム対策、湯治・混浴文化をどう残せるかを考える混浴プロジェクトなどに従事した。5年の任期を終えて、現在のDMOへ籍を移しいよいよ地域づくりの中核へと進む。「5年間でまちの人が知っている顔になっていって、小さいけど何かを変えた時に『よくなったよね』と声をかけられたのが嬉しかった。任期を終えてもまだまだこの場所でやりたいと思

うまく機能させて、根付かせるための会員サポートも重要だね」

DMOは「十和田湖観光交流センターぶらっと」の指定管理者になっている。今はその拠点を観光客や地域に開く取組も積極的に行う。「十和田湖は僻地で、最寄のスーパーへ行くのに1時間かかる。僕はそれもレジャーにして楽しんでるんだけど、高齢者の人はそうはいかない。それに、出入り業者も減ってきている。なら、月に数回でも事業者や住民が地域の野菜が買えるように『道の駅』に来てもらえたらって考えた。それで、『ぶらっと金曜日』をはじめたんだよ」

安藤さんはかたちにできることからコツコツと、顔の見える地域の人の安全保障に貢献できればと話す。そして、十和田湖を訪れた人たちがこの地域の自然や文化、人に対してリスペクトをもって適正な対価を払い、周辺地域も含めて地域に還元される、観光地としてしっかり稼ぎ、波及効果のある仕組みをつくりたいという。

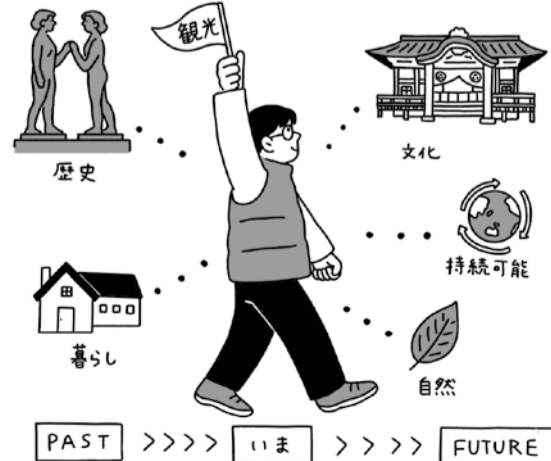
「この地域は人口減少が本当に激しい。25年間で人口は1/3になったんだよね。十和田湖には農業や大きな工場もないし、地域を持続させる手段は観光しかないと思っているんだけど、このままだともたないとも感じている。住む人がいなくなれば、道路や水道といったインフラも維持できない。だからちゃんと稼げる地域にして、収入も向上させたい。毎日この美しい森と湖の絶景に触れられて、高所得になったら住みたくなるよね（笑）」

今後は、オフシーズンと言われている季節も積極的に魅力を伝えていきたいと考えている。十和田湖ガイドハウス隣の冬カヌーやネイチャーセンス研究所による冬のサウナはそのよい例だ。

「春夏秋冬、365日に優劣はないんだけど、今はどうしても夏休みや紅葉期に偏っている。季節変動が大きいし定期雇用もできない。オフシーズンをオフシーズンと思わない事業者が増えて、横の連携ができればもっと変わると思うんだよね。人手不足や公共交通の確保といった課題も大きいけどね」

観光とは本来「国の光を観る」から生まれた言葉。十和田・奥入瀬の光はおそらく、ずっと続いていくだろう。でも、そこに人がいなければ光を観ることは出来ない。安藤さんの考える観光地域づくりは、まだまだこれから。

●安藤さんの職場、十和田湖観光交流センターぶらっとの2階では十和田湖を国立公園にする活動に携わった3大偉人、大町桂月、武田千代三郎、小笠原耕一や乙女の像を制作した高村光太郎の展示が常設されている。●道の駅による出張販売は月1回を予定している（2025年3月現在）「葉物は足が早いし、冷凍できないから助かる」と地域の人の声。



恩返しのための観光

安藤巖乙さんは十和田湖に住みはじめて2025年の4月で丸9年。きっかけは環境省の国立公園満喫プロジェクトでの採用だった。

前職は雑誌の編集者。北海道から沖縄まで、日本各地のローカルを200カ所以上取材した安藤さんが特に気になっていたのが北東北だという。背伸びをせずに、厳しい環境にも身を置き続けるその辛抱強さや素朴な人柄、縄文や蝦夷（えみし）といった地域性にどことなく惹かれていた。そんなとき、十和田湖を拠点にできる求人を見つけた。都市ではなくこの北東北の奥地、超がつくほどローカルな場所だ。

「学生時代に旅をした経験から、観光業に携わりたいたはずだったんだけどね。世界各国の知られていないローカルを自転車ですらったんだけど、その土地の人にお世話になる機会がすごく多かった。初対面の僕を食事に招いてくれたり、家にも泊めてくれた。旅をする中で、地域の宝は暮らしている人、そんなことを教えてもらった気がする。世界中で出会った人たちに僕がどう恩返しができるかって考えたときに、日本の魅力を伝えることだと思った。でもだんだん、伝えるだけでなく魅力をつくって、受け入れる側にまわりたいという思いが強くなっていったんだよ」

環境省時代は国立公園利用企画官として十和田

った」

観光地での舵取り役

「早く行きたければひとりで行け、遠くへ行きたければみんなで行け」というアフリカのことわざを安藤さんは教えてくれた。「自分ひとりでも観光にかかわる仕事ができたくもあるかと思っただよ。やりたいのは、この十和田湖という地域全体を持続可能にしていくこと。一過性のイベントではなく、観光をしながら地域づくりというアウトプットに携わりたい……地域のDMOならその役割を担えると思った」

安藤さんが入社する以前から、地域住人からのDMO組織の評価は毀誉褒貶が激しいが、それをどう払拭し、地域の信頼を得ていくのだろうか？「まずは一緒に歩んで行く住人や事業者の声をしっかりと聞くこと。地域における事業は、過去をないがしろにはできないし、過去には地域住民の思いが詰まっている。過去の延長に未来はない時代かもしれないけど、過去を知らなければ未来はつれない。観光を手段とした地域づくりを全市の行うための取組として、地域内の好循環を生み出したいんだよ。地域にある素材を活かした旅行商品をつくり、販売すること。デジタル対応やサステナブル対応、インバウンド対応。それらを





お土産とお食事の店もりた、森田一成さん、陽子さん夫妻（P10）の3姉妹。左から長女・真由ちゃん（12歳）、次女・陽菜ちゃん（11歳）、三女・紗永ちゃん（9歳）。十和田神社前の水たまりで氷を使って水切りをして遊ぶ。発想がすごい！

観光地での暮らしの在り方

お土産とお食事の店
もりた

森田陽子

Yoko Morita

—

Profile

1983年静岡県藤枝市出身。環境省のアクティブレンジャーとして十和田湖で4年間働く。結婚後3人の娘を産む。子育てと仕事を両立する。

十和田湖との縁を育んだ日々

十和田神社へと続く石畳を歩くと、東北産のお土産品を販売する商店や十和田湖ひめさき、きりたんぼをいただける食堂が散見できる。参道に立ち並ぶ商店は『十和田案内略記』（十和田保勝會）によると、1913（大正2）年には参拝客が宿泊できる「十和田館」など、すでに数軒の施設があったとされている。

その参道の1番奥、十和田神社の鳥居前に位置する「お土産とお食事の店 もりた」は土産物店として1931年から営業を続けている。（休屋で商売をスタートしたのは1926年）3代目である森田一成さん陽子さん夫妻、母親の玲子さんが店に立ち、小学生の3姉妹が店の前を元気に走り回る風景がとても微笑ましい。

もりたで働きながら3姉妹を育てる陽子さんは静岡県出身。登山好きの母親の影響もあり、家族で富士登山や屋久島へ縄文杉を見に行くなど自然に触れる機会が多かったという。（陽子さんも3姉妹の長女）そこで案内してくれたガイドへの憧れもあり、将来は自然にかかわる仕事をしたいと漠然と考えていた。高校卒業後に秋田県立大学・生物環境科学科へと進学。学生時代にはこの辺りでは「根曲り竹」として知られるチシマザザの研究をするために十和田湖周辺にも通っていた。

「甲岳台の四阿でお弁当食べたり、西湖畔山の家に泊まったこともあります。最初は調査対象と

してしか十和田湖を見ていなかったですね」

就職先を決める際にも自然とかかわれる場所を優先。指導教官からアクティブレンジャー（環境省の現地採用枠）の募集を紹介してもらい応募した。

「私はアクティブレンジャーの第一期生だったんです。白神山を第一希望にしてたけど、経験を見れば十和田湖になりますよね（笑）。当時は鳶の巡視やパークボランティア活動、外来種駆除、登山道整備など、一期生なので手探りだったと思いますけど、色々経験させてもらいました。職に就いてからは、だんだん自然の深さに触れていきたいと思うようになったんです。当時は家族も静



岡から何度も遊びに来てくれて。ここは目的地になる場所で、ありえない大自然の中に住んでいると実感したのもこの頃です。仕事だからではなく、純粋に登山をしたとか、写真を撮りたいと思いはじめました。ちなみに、往復2時間の買い物も慣れた頃、『今日絶対に冬タイヤ買わなきゃ』と思って出かけたのに財布を忘れて2往復、4時間移動した時はさすがに参りました（笑）」

アクティブレンジャー時代は早朝の十和田湖を案内する自然ガイドクラブにも所属し、自分自身がおもしろい、伝えたいと思うことをゲストに共有できる場ができた。

「うまくガイドできないと思うこともあったけれど、ツアーが終われば充実感でいっぱいでした。秋の紅葉の時期は薄暗い中、対岸に朝日があつ



景色と信仰がかさなる瞬間を伝えたい



十和田湖自然ガイドクラブ会長／
十和田ビジターセンター職員

中川一樹

Kazuki Nakagawa

—

Profile

1971年東京都狛江市出身。高校卒業後、ご縁あり十和田湖へ移住。たかさご屋勤務を経て現在は十和田ビジターセンターの職員として働く。

十和田湖に移り住んだ理由は「人」

「発荷峠から見ると十和田湖に感動しました」生まれ育った東京・狛江を離れ、弱冠20歳で十和田に移り住んだ中川さん。初めて見た十和田湖の景色は発荷峠からだった。

高校を卒業して建設業に携わっていた中川さんは、ある現場で十和田湖から冬の時期だけ働きにきていた野村幸二さんと出会った。カラオケに行けば、涙を流しながら山本譲二の『奥入瀬』を歌っていた野村さん。そこで色々話を聞くうちに、中川さんは十和田湖に興味をもちはじめた。趣味にしていた写真が生かせるかもしれないと野村さんから「たかさご屋」を紹介され、まずは短期で働くことに。たかさご屋は当時から写真館をやっていた。

「団体客の集合写真をひたすら撮る毎日でした。紅葉のシーズンで、本当に切れ目がなかった」写真を楽しむ余裕もなく、瞬く間に十和田湖での時間が過ぎていった。まずは春や秋に十和田湖、冬は東京と2拠点の生活から始まった。東京に戻ると、不思議と十和田湖で出会った「人」の顔を思い出す。観光地という土地柄、皆あたたかく迎え入れてくれたこと、ひとくせもふたくせもある人たちだったが、そのコミュニケーション自体が、東京育ちの中川さんには、新鮮に映った。

「写真を撮りたいというよりね、ただ素直に十和田湖に行きたいって思うようになったんだよね。

その時点で絵葉書みたいな写真しか撮れない自分に限界を感じていたし……その後、本格的にたかさご屋にお世話になるんだけど、やっぱりすごく忙しくて。十和田湖に向き合う時間なんてなかったなあ。でも仕事が終わった後に、雪まつりのための雪像をみんなで作って、休憩に焼肉食べて飲んで、すごく楽しかった。JRや遊覧船の人たち、客引きの番頭さん、人との関わりが印象的な場所だったね。30年もいるとももちろん嫌な部分も見えてくるけど、休屋・休平の人が、大袈裟かもしれないけどみんな家族のような存在に思えるから、全部受け入れられるようになったのかな」

20年間置き去りだった十和田湖への目覚め

中川さんは、たかさご屋に勤め始めた20年前は、十和田湖に自生する木、花の名前を一つも知らなかったと話す。

「忙しすぎて、全くだね（笑）。そんな中、神社前の『お土産と食事の店もりた』の長男・一成に誘われて、十和田湖自然ガイドクラブに所属したの。最初はアルバイト感覚というか、興味本意でやり始めた。早朝のボランティアガイドなんだけど、先輩の吉崎明子さんから色々教わって、最初はついてまわるだけ。でも、お客さんに喜んでくれた時、すごく嬉しくてね。忙しすぎて、お店に来る人はモノを買って行くだけの存在でしかなかったから、新鮮だったなあ。ありがとありがととうって言ってもらえるの」

2年間でガイドを学び、ようやく3年目からひとりり案内するようになった。

「キクザキイチゲやブナ……覚え始めたら色々楽しくなってきたんだよね」

自然ガイドは神社前を通るコースだったため、神社についても成り立ちなど詳しく知りたと思うようになった。声をかけてくれた森田一成さんと調べはじめたのがきっかけで、青森県上北地域県民局を通して十和田信仰の調査・研究をしている弘前大学の齊藤利男先生とも出会った。



「最初は神社の成り立ちだけとっていたんだけど、いろんな人に会って、今では信仰、古道含めて、歴史のことなど、深い世界へどんどのめり込んでしまった感じかな。正直こんなに広がるとは思わなかった」

明治時代に栗山新兵衛によって開拓された十和田湖。しかし、それ以前から信仰の場として十和田湖は長い歴史をもっている。標高400m、大自然に囲まれた湖が、自然信仰の対象だった。そこに平安時代、仏教の教えが持ち込まれ、修験の場として多くの修験者が十和田湖で修行をしたといわれている。江戸時代からは一般の参詣者も増え、信仰の中心となったのが「十和田神社」だ。（明治初期の廃仏毀釈以前は「十灣寺（とおわんじ）」として存在）

「信仰や歴史を知ることで、十和田湖がまた違って見えてくるんだよね。自然に対する感謝や畏怖の念……信仰と自然がセットになった瞬間の美しさは格別だよ。暮らしているとすごい景色見える時あるでしょ？ 中湖の色とか、空の色とかね。来てくれる人にもこういう感覚を伝えたいんだよね」

300年以上前から十和田湖へと向かう古道がいくつもあり、さまざま伝説や歴史が残る。参詣道本道の五戸口道には、十和田湖を開山した伝説の上人、南祖坊の生家や修行の拠点だった寺があるといわれている。

「わざわざ自分たちの手で道をつくって、みんながここを目指していたんだよ。すごいことだね。そういう背景も含めて十和田湖のこと深く知ってほしいし、好きになるきっかけをつくれたらいいと思う。それを続けていけば、また十和田湖に賑わいが戻ってくるかな……」

ガイドはお客さんに喜んでもらうためにいる、十和田湖でおもてなしをするための存在だと中川さんは話してくれた。

「1番最初に見て感動した発荷峠もね、古道のひとつ。遥拝所でもあったの。30年前とはまた見えるものが変わっているんだよね。もしかしたら、いまなら絵葉書じゃない、誰かに訴えかけられるような写真が撮れるかもしれない（笑）」

●十和田神社拝殿。さらに登った先には青龍大権現（南祖坊）を祀っている。年末年始は初詣に訪れた人で行列をなす。●落ちていたサワグルミの種子を拾って見せてくれた中川さん。冬の散歩もガイドと一緒にさらに楽しく。





自然と人が生かし生かされ、暮らしを紡ぐ場所。

峠を越えてようやくたどり着く、神秘の湖の奥深くへ



1. 冬のカヌーツアー準備中の太田さん (P4)。2. ヒメマスの稚魚にエサをあげる萩沢さん (P5)。3. 道の駅による月に一度の販売会。4. 野生動物だけではなく十和田湖。5. 休憩中の安藤さん (P7)。6. 道の駅十和田湖は施設全体を薪で暖かくする (P14)。7. 森田家勢揃い。みんな笑顔 (P10)。

1 | 2
3 | 4
5 | 6
7

1
2
3 | 4

1. 外輪山の奥には八甲田も見える冬晴れの日。2. 十和田湖のシンボル、乙女の像は高村光太郎の遺作。3. 休屋の商店街。奥へと進めば十和田神社。4. 冬場はインパウンドの旅行者が多い。



十和田湖を灯す、小さな明かり

鹿印合同会社代表／道の駅十和田湖駅長

柴田美紀子

Mikiko Shibata

Profile

1974年愛知県名古屋市出身。地元企業に就職後、和博さんと結婚。3人の娘（上2人は双子）とともに夫について秋田へ移住。

有限会社柴田商店代表取締役／道の駅十和田湖業務責任者

柴田和博

Kazuhiro Shibata

Profile

1975年秋田県鹿角市出身。東海地方の大手スーパーに勤務し、妻・美紀子さんと出会う。2003年、家業を手伝うために秋田へリターン。



“戻るつもりはなかった” 場所での再スタート

2024年12月の夕暮れ、道の駅十和田湖を訪れた男性がいた。「明かりがついていて、温かい場所があるだけでホッとした」。駅長の柴田美紀子さんがかけられた言葉。その人は、毎年冬の時期に十和田湖を訪れるそう。

道の駅十和田湖がオープンしたのは2024年10月。国立公園満喫プロジェクトの一環として環境省、秋田県、小坂町が連携。和井内エリアの観光拠点を整備され、スタートを切った。十和田湖地域において、十和田湖冬物語（27年続く冬祭り）の期間中を除いてはほとんどの店舗が冬季休業に入る中、道の駅十和田湖は年中無休、冬も営業する施設だ。指定管理者は鹿印合同会社。代表の柴田美紀子さんと、夫の和博さんが運営を行っている。

「実家に帰ってくるつもりは全くなかったんです」とは和博さん。小学校時代にお世話になった先生に憧れて教師を目指したが、2度受けた教員採用試験で不合格。夢叶わず、東海地方の大手スーパーへの就職を決めた。そこで出会ったのが妻の美紀子さん。転勤で和歌山、長野、富山などさまざまな地域で働きながら3人の子どもにも恵まれた。次は海外で働くことを目標に頑張っていた矢先、実家の事業を手伝ってほしいと父親から連絡があった。和博さんの実家は発荷峠の展望台にある売店や小坂町のアンテナショップを営む有限会社柴田商店だ。最初は断っていたが、どうしようということで戻ることを決めた。

「私は東北地方を訪れたことが一度もなかったんです。下の子どもハイハイしはじめた頃で不安は



ありましたが、なるようにしかならないと思ってここへやってきました」とは美紀子さん。

2人の結婚式は名古屋だったので、秋田に戻ったタイミングでお披露目を開催した。場所は湖畔が望める十和田プリンスホテル。素晴らしい景色の中で、美紀子さんは目の前に広がる雄大な自然に感動したという。

「でも、僕がいた当時の気持ちは失われていて、廃屋も多くちょっと寂しい感じがありましたね。中学生の頃の十和田湖は都会的で、何をしても売れる時代でした。僕も発荷峠のお店に呼ばれて、カキ氷をひたすら作っていた思い出があります」

秋田へ戻って20年が経った頃、実家の事業と子育てもひと段落して、次のライフステージに向けて新しいことにチャレンジしたいと思った2人は道の駅十和田湖ができることを知り、2023年10月に会社を立ち上げて指定管理者に手を挙げた。

元には戻せないから、 いまできることをやる

「正直ここで商いするのは大変だと思っています。ましてや冬の閑散期も営業するので、いろんな人に心配されますね。だけど、ポジティブなお客さんもいて、人が少ないと自然をゆっくり楽しめるのがいいと言う人も」（和博）

「私たちが頑張っても、かつての活気を取り戻せるとは思いません。でも、数は減ったかもしれないけど、いまも変わらず国立公園の自然を歩きたい人がいて、この十和田湖をひと目見ようと観光でくる人もいて……皆さんにいい印象を残したいですね」（美紀子）

苦しいのは自分たちだけではないし、全部を受け入れて、まずはやってみないとわからない。少しでもやってよかったと思

えるようにしたいんですと2人の決意は固い。

「ひらき直りと立ち直りは早いと友人によく言われます（笑）食事をしてもいい、お茶を飲んでもいい、トイレを利用するだけでもいい、使い方は自由であってほしいし、誰にとっても居心地のいい場所を目指したいです。賑やかであることが全てではないと思っています」と美紀子さん。

働くメンバーにも助けられているという。道の駅十和田湖で働くのは10代、20代と若手を中心。十和田湖に思い入れがあり、自分たちの足りない知識を補ってくれる存在でもある。

「この出会いだけでも道の駅にかかわってよかったと思えることです」（美紀子）

働く人も、ゲストも交わる、まさに十和田湖の交差点である和井内に、小さな明かりが灯りはじめた。

和博さんの祖父、音吉さんはゆっくりと読書をしたいと、大好きな十和田湖・発荷峠に店を構えたという。まだ馬で十和田湖を訪れる時代だ。この道の駅十和田湖はそんな音吉さんの思いに立ち返っているのかもしれない。ゆったりと、そして誰にとっても優しい受け皿になれる場所。

「いつの季節がいいですか？」とよく聞かれます。十和田湖の大自然はつくられたものではなく、ずっとあり続けた美しさ。いつ訪れてもいいですよ、と皆さんに伝えています」

環境を守りながらも、訪れた人それぞれが楽しさを見出せる観光地になってほしいと2人は話す。

①道の駅十和田湖には「十和田湖ひめすの郷展示室」があり、ひめす養殖の歴史などが学べる。②小坂名物「こさかまかつらーめん」。豚肉は地元産の根豚を使用。50年以上前、小坂の七夕祭の準備中に考案されたとか。③オープニングから働いてくれている20代のスタッフと談笑する美紀子さん。



エリア全体で考える新たな観光

十和田プリンスホテル
総支配人

陶光昭

Mitsuaki Sue

Profile

1968年秋田県角館町出身。学生時代は水泳やアルペンスキーなどスポーツに勤む。高校卒業後、'86年にプリンスホテルへ入社。勤続39年。

休屋の対岸 西湖畔から見える風景

「目の前から朝陽のぼり、朝靄がたち込める景色は西湖畔ならではだと思います」と話すのは十和田プリンスホテル総支配人の陶光昭さん。

十和田湖は主に東側6割が青森、西側4割が秋田の面積に含まれる。「十和田神社」や「乙女の像」といった名所を有し、観光客で賑わうのが青森県・休屋エリア。夏の湖水まつりや十和田湖冬物語も同エリアで開催される。一方、十和田プリンスホテルや十和田ホテルが立つ西側は、森や湖の際を歩く約5kmの散歩道が整備され、ゆったりとした時間の流れを感じるエリアだ。

西武グループであるプリンスホテルは、国内外に80以上のホテルを展開し、歴史と実績を積む。琵琶湖、屈斜路湖など「湖畔」にたたくずシリーズがあり、1977年にオープンした十和田プリンスホテルは現在営業している湖畔シリーズの中で1番歴史が長い。さらに十和田湖では唯一、湖畔に面する宿泊施設（キャンプ場を除く）。湖を見渡せる7,000㎡のプライベートガーデンが広がる。

「私がここに配属されたのは2012年、東日本大震災の翌年でした。以前に比べて人が減り、もの寂しさを感じましたね。地元が角館なので、ドライブがてら遊びにきたりと、十和田湖は何度も訪れたことがありました」

秋田県・田沢湖、岩手県・磐石の現場、東京の本社を経て十和田湖へと配属された陶さん。

「でも、美しい自然は変わらず残っていました。十和田湖・奥入瀬渓流は国の特別名勝で天然記念物。一級自然がここにあるんです」

陶さんは営業部門のマネージャーとして、旅行会社へのセールスなども担当した。プライドルやランチbuffetの企画を考え、実行に移した。日帰りでもいいから、まずは利用してホテルを知ってくれる人を増やしたいという気持ちが強かった。周辺地域の人と話をすると、意外にも十和田プリンスホテルを訪れたことがない人も多く出会ったという。

「10年ぐらい前は、朝食前に遊覧船に乗る早朝遊覧の企画もありました。夏休みの1ヶ月ぐらいだけですが、素晴らしい時間でしたね」

十和田湖をつなぎ生まれる 観光のかたち

「私は雪国で育ちましたから、アルペンスキーもやっていて雪には慣れていましたし、ネガティブな印象はなかったんです。でも、十和田湖に配属されて準備のため冬に訪れると、美しさを感じるとともに、とてもさみしい気持ちになったこと

を思い出します。ただ、そのさみしい冬があるから、新緑が豊かな季節であるということにも気づけたんです。春を待ちわび

ていたからこそ見える景色です。5月のゴールデンウィーク明けの緑のグラデーションを見ると、元気になります。これは十和田湖が教えてくれたことだと思っています」

現在十和田プリンスホテルの営業は春から秋にかけてのみ、雪に閉ざされる冬場は休業期間となる。陶さんも冬場は過去に系列のスキー場で整備やパトロール、近年は苗場などでホテルの業務に携わる。

「ありがたいことに、季節的雇用の方はここで仕事するのが楽しいと毎年戻ってきてくれるんです。このロケーションの力もあると思います」

ジョギングやウォーキングをしたりと仕事以外にも充実した時間を過ごしているようだ。十和田湖は繁忙期と閑散期の差が激しく、季節的雇用は人材が安定しないといわれるが、人に恵まれ、続けることができていると陶さんは話す。雇用面を考えても、一年を通して営業ができることが叶えばとも思うが、なかなか現状では難しい。建物の構造や、冬季は道路が一部通行止めになることで流通もスムーズにはいかない、何より公共交通でのアクセスがなくなることも通年で営業に踏み切れない大きな要因だ。

「時間をかけて、ここ十和田湖までわざわざ来ていただけるので、ぜひじっくり長期滞在をしてほしいと思います。十和田プリンスホテルは年配のご夫婦や、お一人さま、3世代でお越しいただくご家族もいます。ゆっくり過ごされる方も多くつかコンテンツはあるものの、ひとつのホテルで

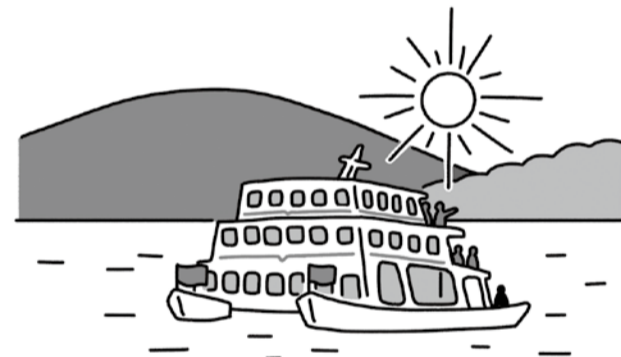


できることには限界もあります。休屋、奥入瀬など他のエリアとも連携して周遊ができる仕組みをつくったり、この自然に対して、どう付加価値をつけていくかが課題だと思っています」

陶さんはエリア全体を活性化できるよう尽力したいと話す。「十和田湖は気付きをくれる場所で、この12年で大好きになりました」

たとえばこんな想像はどうだろう。西湖畔に宿泊した翌朝は朝陽を見ながらの散策タイム。道の駅には周遊バスがあって、それに乗って休屋へ。神社を参拝した後は夕陽を眺めながら地元の人や観光客と交流しながらビールを一杯。この特別な自然の中でどう時間を過ごすのか……エリアをまたげば十和田湖の魅力はより一層、広がっていく。

①十和田プリンスホテルで提供されるディナー「十和田湖フレンチ」十和田湖ひめすはもちろん、北東北の食材をふんだんに詰め込む。②湖畔に隣接する十和田プリンスホテル。[季節によってはディナーをいただきながら湖面に映るムーンロードが楽しめます]と陶さん。③森と湖に包まれる体験ができる西湖畔の遊歩道。



NEWSLETTER

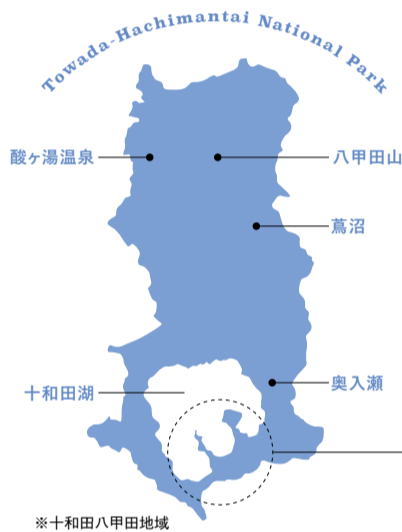
「トワダノオト」の舞台は、十和田八幡平国立公園。十和田湖畔には環境省の現地事務所が構えられ、国立公園の管理を行っている。そんな事務所からのメッセージだ。

1

そもそも国立公園って？

言葉ではよく聞く「国立公園」。でも、具体的に国立公園だと何がおこる？ 保護しているだけではない、国立公園の「利用」とは？

「自然公園法」という法律に基づいて指定されているのが国立公園。「我が国の風景を代表するに足る傑出した自然の風景地」が選ばれることになっている。その景観を守るため、建物や広告の規制をしているのが「保護」。一方で人々に訪れてもらうための施設（道路や歩道、宿舎、食堂やお土産店なども！）を計画的に配置する「利用」の両方のバランスをとっているのが国立公園だ。



CHECK!

十和田八幡平国立公園「十和田湖地域」は全国のモデル地域！

インバウンドが増加する中、国立公園の美しい自然の中での感動体験を柱とした滞在型・高付加価値観光を推進するため、十和田湖地域は宿泊施設を中心とした利用拠点の面的な魅力向上に取り組む先端モデル事業の第一号として選ばれた！

2

国立公園とともに生きる

「保護」と「利用」を行うのが国立公園。では、具体的にどうすることが国立公園ならではの？

LIFE_1

「特別保護地区」では
落ち葉も取っちゃダメ！



国立公園の中でも、保護のレベルが異なっている。いちばん厳しく規制されている「特別保護地区」（奥入瀬渓流や中山・御倉の両半島など）では、生きている植物のみならず「落葉や落枝の採取」まで規制されている！ 落ち葉も景観の一部として大事に、という保護の考え方。

LIFE_2

混雑したら自然を
感じられない？



できるだけ自然をゆっくり落ち着いて楽しみたい、と思うもの。でも、紅葉の絶景には人が殺到してしまう。激しい混雑になってしまった秋の蕨沼では、少しでもゆっくり見ってもらうために、事前予約制を導入した。オーバーツーリズム対策が、この地域には根付きはじめています。

LIFE_3

目立つな、建物！
落ち着いた色で統一感を



「国立公園らしい」と感じるのは、建物の外観がどれも似ているからかもしれない。屋根は必ずこげ茶色で、とんがり帽子の切妻または寄棟。外壁はベージュから茶色までであるが、赤や青、黄色といった色は選べない。自然が主役の国立公園で、建物が目立ったら本末転倒だ。

LIFE_4

湯治・混浴も
国立公園らしさ



十和田八幡平国立公園には、古くからの湯治宿が多く残る。中には混浴の湯も。国立公園が守るべき「景観」の中には、「文化的景観」が含まれるという考え方が出てきている。この地域らしい温泉のあり方も、これから守り、伝えていきたい国立公園の景観のひとつだといえる。

トワダノオト